

## 生命の幅を広げた生き方

名古屋市のある静かな住宅地に、「青木記念ホール」という小さな看板が見える一軒家があります。そこ色々な人が出入りしています。彼らのなかには、法律や医学、政治分野の専門家とその現場のベテランもいれば、一般市民の人々もたくさんいます。私もその中の一人です。

4年前、知人の誘いでここにあるヨガ教室に入りました。ヨガの後大きなテーブルを囲んでランチをしながら楽しい話をするという変わった形のヨガグループでしたが、ここは弁護士の青木仁子さんの自宅で、30年以上も続いてきたメンバーたちは家族のように親しくなっているのを知って、納得しながら、外国人の私がこの中にいることを不思議な縁と感じました。

30年前、独身の青木さんは家を建てる時、たくさんの人が集まる場所にしたいとの思いで防音機能のある、空調設備が付いている大きなホールは家の一部と作られました。台所にビッグサイズの厨房用具や、リビングに数量や種類の多い食器などが揃えているのは青木宅の特徴ともいえます。ここは、名古屋法曹バロックアンサンブルの常設練習場所（時にはパーティの会場）と昼食付ヨガ教室のほか、単発では、ピアノ教室の発表会や、聴衆50人ほどの講演会に、各種研究会、音楽会、詩の朗読会、多数の意義ある会場にも使われてきました。

今年のはじめ、元気だった青木さんは白血病と診断され、体内白血球数の減少傾向から、余命あと3ヶ月と宣告されてしまいました。77歳の年でやりたいことはこれからたくさんあるのに、残酷の現実を受け入れながら、青木さんは後のことを考え始めました。

入院中の病室に、信頼できる同僚に財団法人の設立を依頼し、自宅を財団の管理の下に移し、運営のために多額な資金を寄付したそうです。これについて、青木さんは次のように述べました：

「この建物を社会的資源と考え、社会的意義のある活動の場に提供し、今後も強くそれを願っている。その使用目的は、このホールに来た人が来てよかったと思える、社会的弱者のための活動、国際交流を目指す活動、医療をよくするための活動、音楽を愛する人たちのため練習会場、音楽会などの活動、食文化を考える料理研究の場など、且つ主催者には、それらの運営を民主的に行い、ボランティア精神で行うことが求められる」。

これらの内容は青木さんが長年精力を注いだ活動もあれば、ずっと関心を持っている社会的なテーマもあります。財団法人が設立された後、皆さんはこの建物を「青木記念ホール」と名付け、青木さんの才能と私欲のない人柄に引きつけられたたくさんの仲間と青木ファンが青木記念ホールに集まってきました。

今、青木ホールに定期的に活動しているのは、ヨガと名古屋法曹バロックアンサンブルのほか、料理工房、手芸クラブ、尊厳死サロン、コーラス、朗読、老人会、緩和ケア学ぶ教室など、豊かに生きるための活動グループは短い間二十数個立ち上がりま

した。私が活動している「日中民間交流」もその中に加えています。

もともと私と青木さんとの付き合いは短く、深い関係ではありませんでした。ヨガの中から青木さんの幅広い社会活動を聞いたことで、何回かを中国語の記事で発信したことがありました。青木さんの病状を知ったばかりの時、本人からメールと電話をいただき、私に取りこんでいる日中民間交流はぜひこの青木ホールを利用してほしいとの話でした。

「名古屋に来る中国人が日本のことをよりよく知ってもらうために、青木ホールをぜひ使わせていただきたい」と私は活動の場があることに望外の喜びを覚えました。その後、中国のメディア業界の友人が日本国民の健康意識を知りたい、観光で名古屋に来た新疆ウイグルの親子ツアーが日本の親子と交流したいという要望に、青木ホールで2回民間交流を企画し、その実現に青木さんは終始関心を持ちながら、応援をしてくださいました。青木ホールで交流を経験した中国のお客さんのどなたも青木さんの広い心と人間的な魅力に尊敬の意が自然に沸き起こり、まさに日中交流の効果でした。

宣告された命の期限がとっくに過ぎました。青木さんは以前と変わらない情熱で青木ホールの有効利用に力を注いでいます。減少した白血球の数を戻すことはできませんが、青木さんはベッドでホールの用途に絶えずにアイデアを生み出し、目標を一つ一つ実現していく中、減少していくはずの白血球の数はそのまま止まっていました。これからやりたいと考えていた数々の公益活動はこの数か月の中ほとんど理想に近い形になったと青木さんは満足しているようです。他人や社会のためにすることは自分の中から抑えられない欲望だと青木さんは言うてありますが、このような生き方で病魔を食い止める効力は、医学的に証明されたのでしょうか。

「ある歳から悟ったのですが、他人から何かを得ようと思うと不満が生じる。それは他人が決めることです。他人にしてあげることが自分がやることです。簡単に喜びを得られます」と青木さんはこのような考え方で社会への奉仕から生きる喜びを満喫しながら、生命を燃やすポジティブのエネルギーで人生の幅を広げ、命の限界に対する強烈な意識で人生の濃度を強めています。同時に、青木さんは楽観的で平然とした心理状態で医学的な奇跡を創っています。

## 追記

青木仁子さんは、翌年の春、さくらが咲いている頃に命が燃え尽き、亡くなられました。青木記念ホールはいまだにいろんな市民団体に活用されています。